



6月7日、「第39回星陵祭」が開催される。星陵祭は1年中最も盛り上がりを見せるイベント。各クラスによる展示物は当日、来場者の投票によって順位付けされる。各クラス及び団体は「星陵大賞」受賞を目指し1ヶ月前から準備に取り掛かる。前日も9時まで残り、夢中になって作品づくりに取り組む。ここでは生徒達の個性が混ざり合い、時にはぶつかり合う。



星陵祭の準備に取り組む生徒

5月に入り、各部活動でインターハイ選が始まっている。星陵高校バドミントン部・自転車競技部などは、全国大会出場常連校であり、すでに県大会・東海大会出場を決めている。東海大会出場を果たしたバドミントン部を率いる仁藤・米山組は前回王者という重圧を振り切り、連覇を果たした。バドミ



女子バドミントン部 小野田・ペア

また、陸上競技部・剣道部・女子卓球部も県大会出場を果たした。本校陸上競技部は近年県大会出場者を増やしており、その活躍はめざましいものがある。昨年度まではの県大会出場種目は走り幅跳び・円盤投げのみであった。しかし、今年度はそれに加えて400メートルハード

そんな陸上競技部の中心選手として高校1年次から活躍しているのが3年生の太田彩美だ。顧問の山本晴久先生は「足のつけ方、フォームともに入学時から目をひくものがあり、予想通り3年間で記録を伸ばしてくれた」と語る。そんな太田の motto は「妥協を許さない」と。普段の基礎練習から熱心に取り組んできた。高校最後のインターハイ。県大会では上位入賞を狙っている。ぜひその活躍に注目したい。

(大塚 未緒)

インターハイ予選始まる バドミントン・自転車競技は東海大会へ

真っ白な校舎に並んだ作品には各クラスらしき、つまり、そのクラスの「色」が散りばめられているのだ。今年度のスローガンは、「Colorful」。これは、生徒ひとりひとりの個性や可能性を色に託している。真っ白な校舎の中に、カラフルな展示物。これが今までの星陵祭だった。文化祭実行委員長の野村夏澄は、そこに今、新たな「色」を加えよう

としている。今年、校舎そのものに「色」を与える。星陵の校舎はガラス張りが多く、光に溢れている。星陵祭当日は、校舎のガラスがステンドグラスのように彩られ、光を浴びて色とりどりに輝いているだろう。

第39回星陵祭の特色として、「一般来場者を楽しませる。」「より外部に目を向ける。」という点が挙げられる。昨年度、校内公開日に「T-1 クランプリ」が開催された。「T-1 クランプリ」のTは talent (才能) を意味し、各生徒の持っている才能、または特技を披露してもらった。それまでの星陵祭は「クラス展示」にスポットライトをあてたものであった。それをクラスという団体だけではなく、生徒ひとりひとりにスポットをあて、個を表現する舞台を用意しよう。と考へ、実施された新たな取り組みなのだ。モノマネ・ダンス・歌など思い思いに、生徒たちはいきいきと自分を表現している。昨年度は行内公開での開催であったが、より星陵性を知ってもらおうと今年度は一般公開日



(大久保 真衣)

【藤島和】

新たな「色」を加える取り組み

星陵祭、開催迫る

STAR TIMES

STAR TIMES

5月27日(水曜日)

発行所 星陵高等学校
発行責任 星陵高校生徒会 文芸部
〒418-0035 静岡県富士宮市星山1068
http://www.starhill.ed.jp

第39回星陵祭



校内展示

各クラス・文芸部・囲碁将棋部・陶芸部・美術部・写真部・天文部・演劇部

演劇部公演

場所 会議室

時間

①開場：10:00 開演：10:30
②開場：13:00 開演：13:30

6月7日 体育館イベント

- ★9:30~10:00 中学1年生 合唱
- ★10:00~10:30 書道部 パフォーマンス①
- ★10:50~11:30 吹奏楽部 ミニコンサート
- ★13:00~13:30 書道部 パフォーマンス②
- ★14:00~15:00 ダンス部 パフォーマンス

天火石

★高校一年生の漢文の授業で、性善説と性悪説という中国思想を習った。しかし、新聞やニュースには、私が信じた説を否定する事件や出来事が、毎日躍っている。★5月は体育祭が行われた。しかし、私が注目していたのは、歓声に包まれる競技者ではなかった。星陵のイベントは生徒が中心となるので、実行委員は企画そのものをすべて作らねばならない。大変な上に、実行委員は目立たない立場だ。★なぜ彼らは、目立たない役を一生懸命努められるのだろう。実行委員は自分のためではなく、ヒトのためにベストを尽くす。彼らを見ていたら、性善説を信じられると思った。★「物と春と為す」。これも中国の思想家である莊子の言葉だ。人を幸せにすることで自分も幸せになるという意味だ。来月はいよいよ星陵祭だ。私たちは体育祭に負けないくらい、皆を楽しませる文化祭を作り上げていきたい。

星陵体育祭、開催

一輪になって挑め



選手宣誓をする城市

「校訓『誠友敵』を胸に、学年の壁を越えて一つの輪となり、史上最高の体育祭となるように全力を尽くします。」

選手代表の城市和哉（高校）と大勝明日香（中学）の堂々とした宣誓から、第39回体育祭がスタートした。今年のマは「挑環」。誰もが全力を尽くし共に戦う中で、生徒のつながりが生まれるという思いが、二人の宣誓には込められていた。雲一つない青空の下、開会式は行われた。

しかし、体育祭本部のテントで、実行委員長の遠藤春香は、焦りを感じていたとこの時を振り返っている。この日の準備は2月から始めていた、実行委員をやりたいたと立候補した仲間がいる、チームも決めた。体育祭を創り上げるために一から計画を立て、実行してき

た。今日も朝から用具の確認もした。それでも、万が一のことがあったらという思いは消えなかった。

生徒たちの思いも、彼らに負けてはいなかった。放課後、遅くまで真つ暗なグラウンドで、むかで競争、長縄跳びも練習をしてきた。担任を描いたクラス旗も、個性豊かにできあがった。短い期間だったが、勝つための準備はできている。強い風が吹き、みんな砂にまみれながら、精一杯走り、競い、応援した、史上最高の体育祭はこうして始まった。

（佐野 真理香）

爆発する思い

今回の体育祭で最も注目を集めたのは、午後の最初行われた集団行動だった。黒いT着を着た

46人が現れると、グラウンドは緊張と静寂に包まれた。一糸乱れない行進、風の音が聞こえてきそうなのに切れ味のあふる動き、青空に届くような掛け声、ユーモアのあるアクション。観客の緊張は、大きな歓声に変わっていく。2つの行進がぶつかると斜めに交差し進む、プレイバックするように後ろ向きに歩いて戻っていく。この最大の見せ場では大きな拍手がなり響いた。すべての演技が終わると、グラウンドの外に退場すると、46人は、成功した喜びと達成感を、指導者である山本先生の前で爆発させた。彼らは、新学期も始まって数日しか経っていない頃から、朝練や休み時間だけでなく、部活動の後も真つ暗なグラウンドで毎日練習を重ねてきたのだった。初めは声も出さず、動きが遅く、全体が合わなくて、怒られることが多かった。それでも普通科3年生が中心になって、皆の気持ちを奮い立たせて練習を続けてきたのだ。部活もあり、勉強もある中で、学年や部活の違う仲間たちと限られた時間の中で素晴らしいパフォーマンスができたのは、本番での成功を思い描いていたからだろう。

それが見る者にも伝わってきた。「来年は自分も参加したい」という思いを抱いた後輩も多いはずだ。こうして星陵の体育祭の伝統は受け継がれていく。

（長島 彩貴）

繋がった「輪」



一番の盛り上がりを見せた集団行動



色別対抗リレー

さあ、体育祭で一番盛り上がる競技と言えは：騎馬戦？障害物競争？いやいや、体育祭の山場は、そうリレーです。星陵の体育祭のプログラムには、リレーが3つも載っているのにお気づきですか？つまり、山場が3回もあるのです。まず、午前に行われるのが「クラス対抗リレー」の予選。学年別で全クラスが出場するので、全員目が離せません。男子の数が5人ぎりぎりしかないないので、足が速くても遅くても強制的に走ることになるクラスが出ることも、応援に気合が入る理由になるかもしれせん。

午後からは「クラス対抗リレー」の決勝です。予選で勝ち残った上位クラスが、学年のナンバー1をかけて競います。放課後、クラスの種目練習が終わってから、選手たちは走り込み、バトンパスの確認をしてきたのです。しかし、やはり、ここは部活総合クラスが強かった。1、2、3年のすべてのリレーで部活総合クラスが1位を勝ち取った。

そして、体育祭の最後を飾るのは、「色別対抗リレー」。色別の各学年から選ばれた12人が競うこのリレー。なんと、先輩も後輩も、名前も顔も知らない者同士が、チームになって走るのです。しかし、学年が違おうが、クラスが違おうが、自分の色を優勝させたい思いは同じ。作戦会議をしたくないが、スタートは待って欲しくない。合図のピストルが鳴る。1年生から各色が一斉にスタート。みんなのために懸命に走り、走者は思いをバトンでつないでいく。グラウンドにいる全員が応援している。それは、まさに「挑環」がつながった瞬間でした。勝者はイエロー。しかし、1年生は初めての、2年生は去年より大きなクラスの環ができたはず。そして3年生にとって最後の体育祭は、史上最高の体育祭になったのです。

（渡井 美穂）